

現任訪問介護職員の継続研修 ～情報収集、アセスメント、訪問介護計画作成の課題～

小田 史*

1. はじめに

筆者は2021年～2023年、大阪民主医療機関連合会(以下：大阪民医連)のヘルパー小委員会が主催する訪問介護事業所のサービス提供責任者(約70名)を対象とした継続研修(全5回)の講師を担当した。この研修は訪問介護計画作成にかかわる実践力の向上を目的としたもので、基本的な内容を押さえつつ、現場の課題に応じた内容を取り入れてほしいとの依頼を受けた。研修内容の企画・提案を行っていく必要があり、開催前にはヘルパー小委員会と大阪民医連の介護担当事務局員を交えた打ち合わせを実施し、現場の課題に沿った研修の方向性を確認していった。

初回の研修打ち合わせにおいて明らかになった現場の課題は以下のとおりであった。

- ・判断の根拠となる客観的事実を書かなければいけない
- ・訪問時の記録 簡潔でわかりやすく記入できるようにしたい
- ・サ責(ヘルパーも含め)、情報収集・アセスメント力を向上させたい(事前訪問 訪問時の記録)
- ・書式の工夫を考えたい 例：ADL評価票
- ・利用者の状態像をとらえ、訪問介護計画に反映させたい 短期目標をどう立てるか
- ・なぜそのサービスを行うのか 支援の根拠を明らかにしてヘルパーに伝えていかないといけない
- ・訪問介護計画とケアプランとの整合性 サ責、ケアマネ、ヘルパー、三者のコミュニケーション 情報共有
- ・サ責間でも意見交換して、気づきを促したい
- ・自信をもって実地指導に臨みたい

さまざまな課題がある中で、研修の主たる内容はア

セスメントと訪問介護計画書の作成とし、基礎的な内容から入り、段階的に実践的な内容につなげていくことを確認した。

第1回(2021年8月)、第2回(2022年4月)はコロナ禍の影響を受け、オンライン研修(zoom)であったが、その後 第3回(2022年12月)、第4回(2023年5月)、第5回(2023年10月)は対面研修を実施できた。本稿では、全5回の研修の到達点を研修資料及び終了後アンケートの結果等で振り返り、研修を通じて見えてきた訪問介護現場が抱える情報収集、アセスメント、訪問介護計画作成の課題について明らかにする。

2. 全5回の研修内容

研修の計画段階では、基礎的な内容から段階的に実践的な内容につなげていくこととなっていた。全体の研修期間は2年2か月。全5回全てに参加できた場合もあれば、都合がつかず欠席あるいは研修開始後の入職等で一部参加になるという場合も想定することが必要であり、基本的な内容の講義は繰り返し実施するように工夫した。又、第3回目の研修計画時、ヘルパー小委員会より、現場で特に重視したいのはアセスメント力の強化であるということが伝えられ、以降3回の研修は事例をもとにアセスメントの手順を確認するという内容にした。アセスメントに必要な知識として、介護過程および、ICF(国際生活機能分類)の理解が挙げられる。これらは2008年に介護福祉士養成教育に取り入れられ、2016年開始の実務者研修でも学習が義務付けられているが、現場経験が長い介護職員にはなじみが薄い。特にICFは複雑な記号というイメージがあるためか現場で実践的に活用することが難しいことが課題となっている。そこで大阪健康福祉短期大学付属福祉実践研究センターで開発をすすめている

*大阪健康福祉短期大学 付属福祉実践研究センター

ICF活用ためのシート類を用いて、アセスメントを実践する体験を取り入れた。

コロナ禍のためこの数年間は対面研修できない状況が続いていたことから、異なる事業所のサ責同士が交

流できる貴重な機会としての位置づけもあり、グループワークや意見交流の時間を可能な限りとれるようにした。

第1回 (2021年8月) 2時間	タイトル：訪問介護における記録の書き方 アセスメント/訪問介護計画の作成【基本編】 【主な内容】 専門職としての記録の意義・目的 記録の書き方 事実を正確に伝える記述 アセスメントと訪問介護計画 共通事例でのアセスメント演習 情報収集のポイント アセスメント (分析、統合) 気づき
第2回 (2022年4月) 2時間	タイトル：ICFを用いた介護過程の理解と訪問介護計画 【主な内容】 ICFの特徴を理解する ICFを使って情報を整理する アセスメントの過程がわかる →訪問介護計画の作成に活かす 共通事例でのアセスメント演習
第3回 (2022年12月) 2時間	タイトル：ICFを用いたアセスメントと訪問介護計画の作成 【主な内容】 ICFの特徴 アセスメントについて 講義 情報収集、アセスメントで困っていることや工夫の交流 共通事例でのアセスメント演習 交流 訪問介護計画 作成のポイント 講義 訪問介護計画演習 グループで作成
第4回 (2023年5月) 2時間	タイトル：ICFをわかりやすく 日頃の訪問での情報収集・アセスメントに活かす 【主な内容】 情報収集からアセスメント アセスメントの目的 事前課題 事例ワーク Aさん (認知症) のアセスメント ICF情報分類シート アセスメントシートの活用方法 ICF情報分類シートのワーク 情報収集の視点 ヘルパーの情報収集力をUPする アセスメント 計画書作成のアンケート結果 グループ交流
第5回 (2023年10月) 2時間	タイトル：事例をもとに考える ICFを活用したアセスメント →訪問介護計画の作成 【主な内容】 ICFを活用したアセスメント 講義&ワーク 事前配布 事例演習 Aさんのアセスメントシート作成 個人ワーク グループ交流 アセスメントシート解説 介護計画書作成 講義 グループで介護計画書作成 介護計画書の解説

3. アセスメント・計画書での困りごと アンケートの実施

現場のサ責が実際のアセスメントや計画書作成の何に困っているのか、具体的に把握し研修内容に反映させるべく、第3回研修の事後、第4回研修の事前の2回で自由記述式のアンケート実施を大阪民医連介護担

当事務局員に依頼した。筆者は2回分の結果データから内容を分類、整理してタイトルをつける作業を行った。結果、8つのタイトルが挙がってきた。いずれも現在の訪問介護事業所が抱える課題が反映されている。以下、内容について紹介していく。

1) ケアマネとの関係

1-1: ケアマネからの情報が少ない 情報をもらえないことがある
1-2: ケアマネの情報と本人のADLの状態が一致しない

1-3: ケアマネとの意見の差 ケアマネの理解に課題がある
1-4: ケアマネに要望を出すに対応してもらえない
1-5: 訪問で得た新しい情報をケアマネに伝え連携をとる工夫をしている

ケアマネとの関係性に課題があると感じているサ責は一定数いる。ケアマネの情報収集、アセスメントを経て居宅介護計画書が作成されており、そこに記されている訪問介護の位置づけを基本としてサ責は訪問介護計画書を作成する。実際訪問介護に入ってみると利用者の状態像が異なっていたり、本当にこの支援方法

が適切であるかなど、疑問が生じる場合がある。そうした時には、サ責とケアマネと意見交流し、利用者や家族の視点に立ってより良い支援に向かうようにする必要はある。ケアマネの連携がうまくいかないもどかしさを感じていると考えられる。

2) 情報が不足している

2-1: 事例のように情報がない
2-2: 初回の時、情報が少ない 特に退院時は情報が入ってこない
2-3: ヘルパーから聞くのと、実際に聞くのとは少し違う 人それぞれ聞いて理解していることが異なる
2-4: 独居の人は情報がとりにくい 緊急連絡先がわからない 家族と疎遠の場合難しい
2-5: 利用者本人が意思疎通困難
2-6: 個人情報を得にくい風潮がある
2-7: 情報収集がならず、全く情報がないまま訪問に行くこともあった
2-8: 初めてのサービスでは聞いていた情報と食い違いがあることが多い
2-9: 初回訪問 ケアマネの知らない部分 情報の不足
2-10: 独居の人、家族と疎遠の人は個人情報を得にくい
2-11: 自分のことを話したがらない人 何度も会ってでないとその人が知れない

研修で行う事例演習では、利用者の全体像をとらえ、生活課題は何か導き出すために必要な情報がそ

ろっている。しかし実際は情報の不足が著しいことが挙げられている

3) 情報収集の様式の工夫

3-1: 必要な情報を聞き取れるシートがほしい
3-2: 必要な情報の聞き取りシートを活用する
3-3: どこまで聞いたらいいか、どうやって知り得るか、シートがあればいい
3-4: どのような項目を聞き取り、記録に残せばよいか

2) の情報不足を補うため、効率よく聞き取る方法について検討が必要という認識がある。

4) 利用者からの情報収集 課題

4-1: 年金やお金のことなど質問しにくい ケアマネなら聞けるかもしれない
4-2: ナイーブな話題は聞きにくい
4-3: 家族構成の部分は深く聞きにくい
4-4: 年金のことやお金のことは聞きにくい
4-5: いきなり質問するのは難しい
4-6: 関係性がないと聞けないこともある
4-7: 信頼関係ができるまで尋ねにくいことがある どう尋ねるかの工夫
4-8: 尋問のようになってしまう

利用者との関係性が築けていないと、質問しにくい 家族の理解も必要となってくる。との内容がある。なぜその情報が必要なのか利用者や

5) 利用者からの情報収集 工夫

5-1: 買い物の感覚 高い?安い? 国産がいい などをつかむ
5-2: 掃除のこだわり
5-3: 器機の取扱い 注意点
5-4: 表札、仏壇などをみて情報を得る
5-5: 多くの情報を得るために、なるべく「はい」「いいえ」で答えられる質問をする
5-6: トイレや入浴の介助の時の対話から情報を得ている
5-7: ヘルパーからの情報収集が大切

その人の特徴をとらえる情報収集の工夫、観察する 2、3などは、個別ケアを展開していく上で欠かせないポイントなど具体的な内容が挙がっている。5-1、 い情報である。

6) アセスメント

6-1: アセスメントシートとフェイスシートの違い 4名
6-2: アセスメントの時間がない 介助中にでもできると思うが難しい
6-3: 短い時間の中で多くの情報収集を行い、アセスメントするのが難しい

6-4: アセスメントの時間がとれていない
6-5: アセスメントできないままの訪問開始がある
6-6: アセスメントの内容は変わるが、情報は古いままのことがある 更新されていない
6-7: アセスメントを計画書に活かしていない
6-8: ヘルパーからの情報収集をもとにアセスメントをふくらませる
6-9: 介護計画書の説明の際、アセスメントが不足している部分の情報収集を行う

6-1でアセスメントシートとフェイスシートの違いについて多くの記載があった。アセスメントシートとフェイスシートは実際に各事業所で使用されているものを確認するとほぼ同じものであり、習慣的に情報収集そのものをアセスメントと呼んでいることがわ

かった。

一般的には情報収集で得られた情報を判断、解釈し統合化し、生活課題を導き出す過程がアセスメントである。6-8、9については情報をもとにアセスメントがなされていることがわかる。

7) 計画書について

7-1: 居宅介護計画書と訪問介護計画書との関係
7-2: 計画書の期間
7-3: 計画書は毎回作成? 短期、長期の時などに作成
7-4: 介護計画書の作成時間の確保が難しい
7-5: 計画書の作成方法 短期目標、長期目標の書き方

7-1 居宅介護計画書と訪問介護計画書との関係について、居宅介護計画書は利用者の在宅生活全体をサポートするための計画書であり、その中の訪問介護に期待される役割について書かれているものを具体的に計画に落とし込んだものが訪問介護計画書になる。

アセスメントが正確にできていれば、生活課題も明らかになり、より具体的な計画に結びつく。情報収集からアセスメント、計画書の作成は連続的にとらえることが必要である。

8) 記録内容の充実

8-1: 記録がメモレベル
8-2: 記録の内容 「お変わりありません」と書かれている

記録内容には個人差が大きい。なぜケアにおいて記録を残すことが必要かの理解をした上で、訪問介護の場面で、何に気づき、記録すべきなのかの判断が求め

られる。記録力の向上には研修で基本を押さえることと併せ、OJTの中で鍛えていくことが必要なスキルである。

3. おわりに

依頼時の研修目的は「訪問介護計画書作成にかかわる実践力の向上」と漠然としたものであったが、研修で何を押さえるべきかをその都度、ヘルパー小委員会のメンバー及び大阪民医連の介護担当事務局員と確認しながら進めることで、できるだけ現場のニーズとズレが起こらないようにしてきた。ICFを活用したアセスメントなど、現場ではなじみがないものであっても、情報のとらえ方など普段のケアを考える視点として活かせるよう研修の中軸においた。このように現場のニーズに対応するオーダーメイドの継続研修は今後、福祉現場でケアの質を向上させる重要な位置づけを担っていくと考えている。

以上